

# サンパウロ新聞 岩手県人会カナネイア旅行記 有名なカキの養殖地を訪問 14/12/01 (17:40)



旅館前で集合写真

## 千田会長「気持ちは一つの家族」

岩手県人会(千田曠暁会長)は14日から16日にかけて親睦旅行を開催し、県人会関係者ら45人(うち2人は邦字紙記者)が参加した。一行が訪れたのは、サンパウロ州最南端に位置するカナネイア市。同地はカキの養殖をはじめ、西暦1531年にポルトガルのマルチン・アフォンソ・デ・ソウザが上陸して開拓したブラジルで最も古い街としても知られており、一行がその海の幸や古い街並みを楽しんだ様子を紹介する。(倉茂孝明記者)

小雨がパラつく天気の中、14日深夜にバス1台に乗り込んだ一行は、約250キロ離れたカナネイア市に向けてリベルダーデ広場を出発。翌15日午前6時過ぎ、大西洋に面して長く伸びるコンプリーダ島と本土の間に位置する「カナネイア島」の日系旅館に到着した。

旅館で朝食を済ませ、午前9時過ぎから遊覧船に乗った一行は、灰色の暗い曇り空のもと雨が降ったり止んだりする天気の中、原生林を残すために自然保護区域に指定されているという島の緑を船の中から眺め、またイルカの群れに遭遇すると水面から見え隠れする姿を探しては声を上げて楽しんだ。

船から降りるとその後はすっかり空は晴れ渡り、一行は昔のポルトガル式の街並みが残る海沿いの道を散策。ソウザ上陸450年記念に作られた「大砲 広場」や、西暦1900年に植えられたフィゲイラの大木、水揚げされたばかりのロバーロ(スズキ)やバグリ(ナマズ)など多くの魚を売るペイシャリアの並ぶ通りを抜け、海の見えるバルで生ガキやビールを(昼食前に)味わった。

その間、最近買ったという釣り竿を持ってきていた副部幸司さん(67、岐阜)は「いつかやってみたかった」と釣りに挑戦し見事ヒット。夫人と共に笑顔がこぼれた。

旅館で昼食を平らげた一行は、午後は自由参加で対岸のコンプリーダ島へ。島内をバスで移動し外洋側の砂浜へ向かった。ブラジルの海に二十数年ぶりに来たという尾田美津子さん(神奈川県)は、「子供が大きくなってから海に行く機会が無くなっちゃって。久しぶりに来て若返りました」と生き生きとした表情を見せていた。

その夜は持参したカラオケセットで歌声を披露する人、岩手県の名酒「南部美人」を飲んだりする人など、それぞれ思い思いの時間を過ごした。

最終日は自由行動だったため、釣りを楽しむ人や、再び街へ散策に行く人などさまざま。記者は10人程と共にポルトガル様式の家並み(中には1735年に建てられたものも)残る道を歩き、民家に隠れた小さな博物館を訪れた。

博物館の壁は315年前にクジラの油と貝殻を混ぜて作ったものでできており、かつて壁を作るために欧州から持ち込まれたという大人5人は入るだろうかという大きな鍋の展示も。また、ポルトガルやスペインが侵略のため使った鎧甲や盾、刀といった武器、クジラの骨、歴史紹介パネルなどを鑑賞。ブラジルで最も古い街の歴史に思いを馳せた。

最後の昼食を旅館で食べ、一行は午後2時過ぎにサンパウロへ向け出発。午後8時半ごろリベルダーデで無事解散した。

親子3代で参加した滝谷英美さん(22、3世)は、「おじいちゃんに誘ってもらい初めて参加した。とても楽しかった」と振り返り、武田春雄さん(71、福島)は、「賛助会に入り約13年ほど。岩手は大らかで会館の場所も良いし、皆集まっていいね」と話していた。

親睦旅行を終えて千田会長は、「気持ちは一つの家族。和気あいあいとできて良かった。来月(12月)13日に餅つき、14日に忘年会があるので機会がある方はぜひ参加して下さい」と締めくくった。

2014年11月29日付